地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円（本体139円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター
編集　アクセス編集委員会
〒162-0836　東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

ウチナーのマブイ（魂）を本にする

沖縄のヒーローに惹かれた３人のナイチャー（内地人）

文／『琉神マブヤー でーじ読本』企画・編集　片岡力（樫辺勒）

もしゴーヤーと玉子とポークがそれぞれ別々の皿に盛られて出てきたら、それは沖縄料理じゃない。なぜならそこには「チャンプルー」がないからだ。いろんなものを――時には苦くて飲み込みにくいものまで――チャンプルー＝まぜこぜにして、そこから独自の味わいを生む。それでこそ沖縄料理ゴーヤーチャンプルーというものだ。チャンプルーとはたんに料理の技法のことではない。それはウチナー（沖縄）をウチナーたらしめる言葉であり、ウチナーのマブイ（スピリット、魂）そのものである。チャンプルーというマブイがあって初めて沖縄料理ゴーヤーチャンプルーが成り立つのだ。

“沖縄らしさ”のために闘うヒーロー

沖縄のローカルヒーロー番組『琉神マブヤー』に登場する悪の「マジムン」（魔物）軍団が、沖縄を「ハゴー」（汚い）にする目的で狙うのが、まさにそのマブイである。沖縄らしさを司るマブイを象った石「マブイストーン」を奪うことで、沖縄らしさをスポイルするのがマジムンの戦略だ（なんと高度な文化戦略だろう！）。実際にチャンプルーのマブイストーンが奪われたとたん、町の食堂では、冒頭に書いたチャンプルーされていないゴーヤーチャンプルーが運ばれてくる。マブイストーンを奪い返して、ちゃんとしたゴーヤーチャンプルーに戻さなくては……。そんな一見どうでもよさそうで実はとてつもなく大切なことのために闘うのが、ニライカナイからやって来た勇者・琉神マブヤーなのである。

『琉神マブヤー でーじ読本　～ヒーローソフィカル沖縄文化論～』山本伸著／三月社刊／2015年8月3日発行／ISBN978-4-9907755-1-3 C0076／A5判並製カラー口絵8ページ／図版多数／256ページ

もちろん、沖縄を沖縄たらしめているマブイはそれだけではない。ウチナーグチ（沖縄方言）のマブイストーンが奪われると、方言バリバリのオバァが突如として言い慣れない標準語を話しだす。テーゲー（適当・寛容）のマブイストーンが失われると、ふだんは温かい沖縄人の同士の人間関係がとたんにギスギスしはじめる。そのほか、なんくるないさ、イチャリバーチョーデー（一度出会えばみな兄弟）、命どぅ宝、島唄、エイサー……たくさんのマブイがあり、それらがすべて守られてこその沖縄なのである。つまり琉神マブヤーが守ろうとしているのは、沖縄が沖縄であること、すなわちウチナーのアイデンティティーそのものにほかならない。

書き手が見つからない！

『琉神マブヤー』シリーズはこうしたユニークさによって、２００８年の最初のテレビシリーズ放送以来、沖縄で絶大な人気を獲得し、ピーク時には３００億円に達するとも言われている経済効果を沖縄にもたらした。今年２０１５年もその最新作『琉神マブヤー５』（この場合の「５」は「イチチ」と読む）が１０月より放送予定されている（琉球放送）。

しかし、このユニークさがナイチャー（内地人）にはなかなか伝わらない。放送網や方言の問題もあるのだろうが、特撮ヒーロー番組にくわしい者に話を振ってみても、「なんかやってるらしいね」という程度の反応しか返ってこないのは納得いかなかった。かつて特撮ライターをやっていた身としては、「だったら自分が解説本を作って、『マブヤー』の面白さを天下に知らしめてやろうじゃないか！」……とは思ったものの、いかんせん沖縄の方言や文化に明るくない。「ここは沖縄の人ならきっと大笑いするシーンなんだろうな」と見当はつくもののイマイチよくわからない、ぐらいのレベルではお話にならないのだ。沖縄では誰もが知っている有名芸能人がカメオ出演しているのに気づかないのでは、せっかく本を作ったところで沖縄の読者に笑われてしまうのがオチである。

誰か沖縄の文化・習俗・芸能に通じていて、かつ特撮ヒーロー番組のファンはいないものか。特撮ライターで沖縄にくわしい者は見つかりそうにない。ならば、沖縄在住の人の中に、特撮関係の文章を書ける人をさがすほう

が早いか。しかしそうするにはそもそも沖縄に人脈がないと……悶々とした日々がつづいた。

だから、ひょんなことで顔を出したポップカルチャー学会というアカデミックな場所で、とある大学教授が『琉神マブヤー』を取り上げて学会発表していたことを知ったときには、「（こんなところに執筆者が）いた！」と思わず声が出たものだ。

カリブ文学者がなぜ？

いささか変わった志向をお持ちのその教授、山本伸先生は、カリブ諸国の植民地文学が専門で、毎年夏に沖縄国際大学で集中講義を行なっている。それにしてもなぜカリブ文学者が『琉神マブヤー』に惹かれたのか？　山本先生曰く、ハイチやジャマイカといったカリブ諸国の人びとは、欧米から押し寄せるグローバリズムの大波を受け止めつつ、しかしそれでもなお伝統的なローカルさを失わずに、それらをチャンプルー（まぜこぜ）して逞しく生き延びている。そうしたカリブ諸国の文化戦略――グロー〈カ〉リズム――と同じものが沖縄にあり、それを体現しているのが『琉神マブヤー』だ、とのこと。なるほど！　カリブ文学者がなぜ沖縄の特撮ヒーローに惹かれたのかが腑に落ちた。

こうして、「『マブヤー』のディープな解説を書ける執筆者なんていないだろうな」と思っていた編集者と、「『マブヤー』の解説を本にしようという編集者なんていないだろうな」と思っていた執筆者は出会い、初対面の時点でもうどんな本にするかを話し合っていた訳である。

もう取り下げられない…

最初にこの企画を持ち込んだ版元は、ふだんから付き合いのある出版社だった。一度は引き受けてくれたものの、草稿を読んだ時点で「ディープすぎる、もう少し薄くライトにならないのか」と言ってきた。まぁ『琉神マブヤー』を観たことがないようではそれもしょうがない、この手のマニア向けの本はディープさが一番の売りになるのだが、そこを削るようでは論外だと考え、企画を引き上げた。

そして、友人の石井裕一氏が（いつの間にかこっそりと、しかも一人で）立ち上げた新規版元・三月社に企画の話をしてみた。石井氏は大いに興味を持ってくれ、引き受けようと言ってくれた。ありがたかったが、新規の一人版元には少々荷が重い企画かもしれないと躊躇もした。著者印税や編集費はコストカットできても、番組の著作権者に支払うロイヤリティーはそうそう下げられない。カラーページも必要だろうし、俳優インタビューをとるなら別途謝礼が必要だ。そもそも沖縄まで取材に行くだけでも相当経費がかかる。

さんざん迷って、いったんは企画を取り下げようとさえしたが、時すでに遅し、当の石井氏に「『琉神マブヤー』ファンのマブイ」がすっかり宿ってしまっていたのだった……。

そしてマブヤー関係者との交渉、および沖縄入り。突然「『マブヤー』の本を作りたいんです！」と言ってきた見ず知らずのナイチャーに、マブヤー関係者が当初眉に唾をつけていたのは無理もないというもの。しかしこちらから「第何話のあそこのシーンがああなっていますが、あれは……」と細かいことを訊きはじめると、「そんなところまで観てるのか！」と逆に感心と関心を示すようになった。そうやって、ただでさえ薄いウチナーンチュ（沖縄人）の警戒心は見る見るうちに解けていった。

さらに、ウチナーンチュ同士では利害や人間関係が絡んで躊躇しがちな話でも、内地からやって来た異邦人にはフラットに話せるということがあるのだろう、けっこう突っ込んだ部分さえ話してくれるまでになった。

こうして、ウチナーのマブイをマブイグミ（魂込め）された３人のナイチャーの手で出来上がった唯一無二の「でーじ」な（＝ウルティメット）一冊が、『琉神マブヤー でーじ読本　～ヒーローソフィカル沖縄文化論～』である。ウチナーのマブイを知りたいなら、『マブヤー』を観て、『でーじ読本』を読むのが一番やっさ～。

＊

＜かたおか・ちから（かしべ・ろく）／『琉神マブヤー でーじ読本』企画・編集＞

新刊ダイジェスト

※価格は税込（消費税率８%）表示です。

『炭都　ときの欠片と追憶の光　－三池、三島、太平洋から』●岩崎拓郎著

近代化を支え、高度経済成長期以前には活況を呈した炭鉱が、わが国から消滅して久しくなった。この本に取り上げられている、福岡・三池炭鉱（平成９年３月閉山）、長崎・池島炭鉱（平成13年11月閉山）、北海道・太平洋炭鉱（平成14年１月閉山）は、わが国で最後まで存続した３つの炭鉱である。炭鉱の消滅により、それにかかわる暮らしも消滅した。往時の写真を見ていると、「かつてどんな暮らしがあったんだろう」と想像することができる。どれもとても人間くさく感じられるのは、石炭の採掘には多くの労働力が必要だったからなのだろうか。しかし、それは特別なものではない。2015年７月、世界遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産」の23の構成資産には、三池炭鉱（宮原坑、万田坑、専用鉄道敷線）が含まれている。大牟田や荒尾には、「かつてあった大きな炭鉱街の雰囲気」が色濃く残る。そんな匂いを探す旅もよいかもしれない。

◆ 3024円・B４判・93頁・**リーブル出版**・高知・2015/8刊・ISBN978-4-86338-120-9

『若勢　－出羽国の農業を支えた若者たち』●須藤　功著

若勢（わかぜ）とは、出羽（秋田、山形県）で大地主の農家に雇われて働いた若者をいう。江戸時代後期から昭和30年代頃まで続いた。多くは農家の二、三男で、米俵数を報酬に、半年、一年、あるいは秋の収穫期間で契約した。一方的な雇用ではなく、働こうとする若者が朝市の一画に立ち、雇主と直接交渉した。これを「若勢市」といった。この労働力が出羽の農業を支えたといわれる。

それにも拘わらず、記録や研究文献は少なく、歴史も実態も殆ど知られていない。著者は江戸時代の地誌、随筆、菅江真澄の見聞録、近代の農事調査、新聞記事、農林大臣の回想録、郷土史、民俗調査報告、農民日記など限られた資料を丹念に紐解き、成り立ち、勞動の様子、雇主との関係など全体像を明らかにしていく。若勢から戸主になった者もいる。戦争と満州開拓移民で若勢が望めなくなった昭和10年代の時代状況や、玄海の「女中市」など農民の各地の類似の労働形態にも言及する。

◆1944円・四六判・238頁・**無明舎出版**・秋田・2015/8刊・ISBN978-4-89544-594-8

『フロイスとの旅を終えて今想うこと　－日本の戦国時代を生き抜いたポルトガル人宣教師』●川崎桃太著

ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスは、戦国時代の日本を記録した『日本史』を書き上げたことで知られています。『日本史』は外国人の視点で書かれ、他の同時代の記録とはまた異なる戦国時代像を私たちに伝えてくれます。著者はそんなフロイス『日本史』を完訳しています。本書第一部ではフロイスの日本での活動の記録や日本のキリシタンについてなどを、『日本史』からの引用を中心にまとめています。織田信長や豊臣秀吉といった時の権力者との交渉、高山右近や和田惟政等畿内の親しい豪族とのつきあい、そして仏僧を論破し教えを説き布教をしている姿など、常にフロイスの冷静な観察眼が光るとともに異邦人ならではの目の付け所が興味深い。翻訳は文庫で全12巻の大著ですが、本書を一読するとそれにも挑戦しようかという誘惑に駆られてしまいます。第二部は今年百歳を迎えた著者の随想、特にキリスト教徒の視点から見た現代日本の姿がまとめられています。

◆1404円・四六判・124頁・**三学出版**・滋賀・2015/6刊・ISBN978-4-903520-98-8

『古代学の風景　折口信夫・琉球・日本』●保坂達雄著

本書は、著者が以前、同出版社より刊行した２冊の本（『神と巫女の古代伝承論』『神話の生成と折口学の射程』）に収載されなかった事典類の解説・随想・書評などを集めて、テーマごとに配列したものである。著者は折口学に精通しており、「まれびと論」「貴種流離譚」などの解説はこれから折口学を学ぼうとする人にも手ごろな入門書といえる。なかでも「折口信夫の仏教観」は啓発されること大である。仏教＝外来文化が浸透・定着するには、在来の古代信仰の中にそれを受容する基盤・素地がすでに存在していたとの見解から、仏教と民俗信仰との習合を小説の形で表したのが、『死者の書』であったとされる。

また、謡曲・説教節・浄瑠璃によってさまざまに脚色された「高安長者伝説」の原型を考察する手段として、小説『身毒丸』が創作されたという。とくに後者は、謎解きをしていくように神人・唱門師・田楽法師と「唱導」との関係を説明するくだりは興味をそそる。

◆3240円・Ａ５判・245頁・**岩田書院**・東京・2015/7刊・ISBN978-4-87294-916-2

『Ｂｅ！１２０号　－特集／見えてきた驚きの実態！トラウマと依存〈脳の最新研究〉』●今成知美編

様々な依存症と回復のための情報誌「Ｂｅ！」がこの秋の120号で創刊30周年を迎えた。今でも大学生のイッキ飲みによる急性アルコール中毒死という痛ましい報道に接することがあるが、『アルコール・シンドローム』という誌名だった創刊当時は、イッキ飲みブームの只中だったという。中高生の飲酒コンパも社会問題化していた。満を持しての創刊だったはずだが、取次業者には「3号続いたらまたおいで」と言われたという。生まれてすぐに消えていく雑誌の方が多いのだから、と。

さてその記念すべき120号の特集は「トラウマと依存〈脳の最新研究〉」。虐待やDV等、過酷な環境下では脳の中で何が起きているのか。最新の脳科学で言われているのは、心の傷、と言うが、実は脳というハードウェアが傷ついているのだということだ。

しかし、脳は、それで壊れてしまったわけではない。環境を整えることで神経細胞を再生させ、回路を修復させる可塑性をもっている。

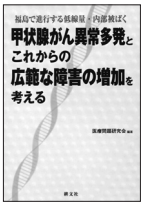
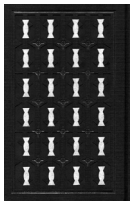
◆864円・Ａ５判・105頁・**アスク・ヒューマン・ケア**・東京・2015/9刊・ISBN978-4-901030-97-7

売行良好書

期間：2015年8月16日～9月15日

［出荷センター扱い］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『点滴ポール　生き抜くという旗印』1512円・ナナロク社　(2)『本土の人間は知らないが、沖縄の人はみんな知っていること』1404円・書籍情報社　(3)『幕末の奇跡』・2376・円・弦書房　(4)『甲状腺がん異常多発とこれからの広範な障害の増加を考える』1296円・耕文社　(5)『あたしとあなた』2160円・ナナロク社　(6)『東西寄席演芸家銘鑑　総天然色』2160円・東京かわら版　(7)『レズビアン・アイデンティティーズ』2592円・洛北出版　(8)『不登校は１日３分の働きかけで９９％解決する』864円・リーブル出版　(9)『この作家この１０冊』2376円・本の雑誌社　(10)『琉神マブヤーでーじ読本』2376円・三月社　(11)『徴兵体験　百人百話』1620円・１７出版　(12)『韓国に遺る日本の建物を訪ねて』1620円・書肆侃侃房

［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『あたしとあなた』2160円・ナナロク社　(2)『本の雑誌　３８８号』720円・本の雑誌社　(3)『東京かわら版　９月号』500円・東京かわら版　(4)『百歳までの読書術』1836円・本の雑誌社　(5)『パズル通信ニコリ　Ｖｏｌ．１５２』907円・ニコリ　(6)『オレたち将棋人族〈エピソード１〉２００５－２００９』1566円・双峰社　(7)『古本屋ツアー・イン・神保町』2160円・本の雑誌社　(8)『高尾山・景信山・陣馬山登山詳細図』823円・吉備人出版　(9)『数独通信　Ｖｏｌ．２９』720円・ニコリ　(10)『丸わかりＤＶＤ付！酒井式描画指導の全手順・全スキル』3132円・学芸みらい社

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『不登校は１日３分の働きかけで９９％解決する』864円・リーブル出版　(2)『琉球武術「首里手」の構造解明』1620円・琉球新報社　(3)『歴史小説　合気の武田惣角』1620円・歴史春秋社　(4)『こころとからだ　奄美再生のレシピ』1512円・海風社　(5)『サイレンと犀』1836円・書肆侃侃房　(6)『奥武・秩父　峠歩きガイド』2052円・さきたま出版会　(7)『教養講座　琉球・沖縄史』2160円・編集工房東洋企画　(8)『少年日本史』3240円・皇學館大學出版部　(9)『東京オリンピックを迎える学生・社会人のための観光・人流概論』3780円・システムオリジン　(10)『沖縄に内なる民主主義はあるか』1620円・ヒジャイ出版　(11)『途上国の人々との話し方』3780円・みずのわ出版

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼先月号で告知いたしました**明治大学リバティアカデミー**と、本の街神保町を元気にする会の**公開講座「本の街・神保町で考える」Part5【戦後70年　古書と神保町】**の講義内容と講師陣の詳細をお知らせいたします。10/3は「戦前・戦中を生き抜いた神保町」。講師は、本の街・神保町を元気にする会理事で八木書店ホールディングス代表の八木壮一氏ほか。10/17は「江戸が生きている神保町」。講師は、『和本への招待』（角川選書）等の著書のある誠心堂書店の橋口侯之介氏。10/31は「貸本まんがの時代」。講師は雑誌『貸本マンガ史研究』の三宅秀典氏と元「ガロ」編集者で北冬書房社主の高野慎三氏。11/14は「戦争俳句と俳書・俳人たち」。講師は、日本古書通信編集長、樽見博氏。11/28は「これからの神保町を語る」。講師は、美術・デザインのかげろう文庫、佐藤龍氏ほか。いずれも土曜日、13:00～14:30。明治大学駿河台キャンパス、アカデミーコモン11Fにて。因みに2011年から続くこの継続講義「本の街・神保町で考える」の過去の内容は以下のようなものでした。2011：本の一生。2012：本と映画と神保町。2013：神保町と近代出版100年。2014：本の街・神保町の人物誌。

郵便販売のご注文方法

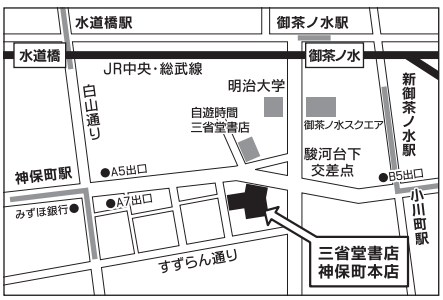
◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までＦＡＸでご連絡ください。
◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせて頂きます。基本的にメール便は、一冊２１０円でお送り致します。（メール便の到着は、発送してから３～４日かかります。）お急ぎの方、その他ご要望がございます場合はお気軽に下記までお問い合せ下さいませ。
◎なお書籍お買上総計（税抜き価格）が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせて頂きます。

★地方・小出版流通センター
ＦＡＸ：０３－３２３５－６１８２

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

三省堂書店 BOOKS SANSEIDO

営業のごあんない

神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。